

CARE World

Vol. **5** ケア・インターナショナル ジャパン
Newsletter
February 2007

ケア・インターナショナル
ジャパンは、世界70カ国
以上で貧困の根源の解決
に取り組む国際協力NGO、
CAREのメンバーです。
CAREの活動は、世界中の
33万人のサポーターに支
えられています。



Contents



- page 3 事務局からの報告
- page 4 スペシャルレポート
「CARE設立60周年記念ディナー」報告
事務局長 野口 千歳
- page 7 カンボジア「レインボー事業」終了報告
事業部インターン 青木 真理子
- page 8 インドネシア スマトラ沖津波復興支援
「国内避難民のための水と衛生プロジェクト」終了報告
プログラムコーディネーター 鈴木 幸子
- page 9 インドネシア
「マドゥーラ避難民の生活復興支援プロジェクト」終了報告
プログラムコーディネーター 鈴木 幸子
- page 10 フィールド最前線
カンボジア「コミュニティのための人材育成事業」
プログラムコーディネーター 竹中 宏美
- page 12 Smile from Cambodia ~カンボジア発スマイル宅配便
- page 13 世界のCARE
CARE in Indonesia
~スマトラ沖津波から2年 インドネシア アチェからのストーリー
- page 14 私スタイルのCAREライフ
ケア・インターナショナル ジャパン会員、ボランティア エリック コーピエル Eric Korpiel
- page 15 ジャワ通信
ジャワ島地震緊急支援事業プロジェクトマネージャー 熊澤 ゆり
- page 16 CARE Notice Board

表紙写真：インドネシア
©2005 CARE/Edy Purnomo

事務局からの報告

カンボジア「女子教育事業 サマキクマールⅡ」終了報告会

2006年11月30日(木)、JICA地球ひろばにて、カンボジア「女子教育事業 サマキクマールⅡ」の事業終了報告会を開催しました。現地で活動を行ってきたプロジェクトマネージャーの遠藤 恵が報告を行いました。

女子に対する教育の機会が制限されている貧困地域において、彼女たちの置かれている社会構造の理解と教育の重要性に対する意識が向上し、それを行動に移すための枠組みが作られるようになった成果をさまざまな事例を通して説明しました。

特に、事業に参加したカンボジア人女性たちに対して行ったインタビューの内容から、知識を得て自信を持ち、尊敬されるようになった喜びが報告され、参加者からは具体的な成果を聞くことができたのがよかったという感想が多数寄せられました。

参加者は女子教育や開発援助に関心のある方が大半で、事業の計画法や評価手法について専門性の高い質問が相次ぎ、終了後も報告者に質問しようとする人たちがずらりと並ぶ盛況ぶりでした。



静岡県立大学において事務局長が講演を行いました

2006年12月5日(火)、「貧困を生み出す根源の解決に向けて：ニーズベースからライツベースのアプローチ」と題し、静岡県立大学で野口千歳常務理事・事務局長が講演を行いました。看護学部、国際関係学部、経済情報学部などの学部生を中心に50名ほどの方が参加してくださいました。効果的・効率的で、かつコミュニティの自立発展につながる支援方法を常に模索し続けているCAREが、事業を実施していく中でどのようにアプローチを変えてきたのかということについて、理論とケーススタディを通して紹介しました。

参加された方は、特にカンボジアやスリランカにおける事業の事例に大変関心を持ち、活動現場の写真を交えての具体的な話に真剣に耳を傾けていました。途上国の現場を視察したことのある学生さんからは、ライツベース・アプローチにおけるモニタリング手法や指標などについての質問が出されました。また、社会人の参加者の中にはCAREにおけるボランティアの具体的な参加方法について関心を持ってくださる方もいらっしゃいました。

「CARE設立60周年記念ディナー」報告

事務局長 野口 千歳

第二次世界大戦後、1945年にヨーロッパの被災者を支援する目的でアメリカで設立されたCAREは、今では日、英、仏、豪などを含める12カ国のメンバーから構成され、約70カ国の途上国や紛争地域において4500万人以上の人々の自立を支援するNGOに成長しました。その設立60周年を祝い、2006年11月18日、帝国ホテル3階富士の間にて、「CARE設立60周年記念ディナー」を開催しました。

主なゲストとして高円宮妃殿下のほか、CAREの活動国の大使ご夫妻や代表者（ヨルダン、マリ、スリランカ、USA、UK）および関係者の方々にご臨席いただきました。また、ケア・インターナショナルからは、副会長でありCARE60周

年委員会の委員長であるマリナ・ドゥ・ブランド夫妻が参加しました。

当日は、ケア フレンズ・東京会長の安倍洋子氏のほか、ケア フレンズ岡山名誉会長の加藤睦子氏、当財団初代理事長夫人の横田笑氏の表彰式が行われました。CAREは設立60周年を祝うにあたり、特に貧困をなくし、平和な社会をつくる過程における女性の重要な役割に光をあてています。安倍氏、加藤氏、横田氏は、途上国の女性やコミュニティのエンパワーメントを目指し、日本の人々の意識を高め、また理解を深めることに長年、貢献してくださっています。記念式典ではこの献身的なご努力を称え、ケア・インターナショナルから表彰のレターと記念品が贈られました。

CARE設立60周年記念ディナー

日時：2006年11月18日（土）

場所：帝国ホテル3階富士の間

後援：フランス大使館、スリランカ大使館

特別協賛：株式会社VSN

協賛：セイコーインスツル株式会社、ティファニー・アンド・カンパニー・ジャパン・インク

協力：スターバックス コーヒー ジャパン株式会社

ディナーの後には、1990年の第4回「マリア・カラス国際声楽コンクール」の優勝を機に世界的に活躍されているソプラノ歌手、中丸三千繪氏のコンサートが開催されました。

当日は400名以上の会員・寄付者・関係者の方にご参加いただき、CARE60周年の節目にあたり皆さまに日頃の感謝の意を表するとともに、親睦を深め、支援活動についてより一層の理解を促進し、ご協力を仰ぐという意味で、大変意義深い会となりました。

ご参加いただきました皆様、ラッフル景品などの協賛をしていただきました企業の皆様、そして運営の面でご協力いただきました方々に心よりお礼申し上げます。

なお、ディナー入場券およびチャリティ・ラッフル券販売からの500万円近い収益は、CAREの貧困をなくすための活動に役立させていただきます。



日本におけるCAREの発展に長年、多大なるご貢献をいただきました安倍洋子氏(左)、加藤睦子氏(中央)、横田笑氏(右)がケア・インターナショナルから表彰されました



来賓のお客様とともに(以下、敬称略。左より、横田笑、加藤睦子、安倍洋子、高円宮妃殿下、関口房朗、Marina de Brantes、Guy de Brantes、Kalvinder Pook、Chris Pook 英国大使館参事官)



世界的に活躍中のソプラノ歌手、中丸三千繪氏によるコンサートが開催され、会場は記念ディナーにふさわしい優雅な雰囲気に



帝国ホテル3階の富士の間において開催された記念ディナーに、400名以上の会員・寄付者・関係者の方々にお集まりいただきました

CARE設立60周年記念ディナー ケア・インターナショナル ジャパン理事長 関口房朗 開会の挨拶

本日は、高円宮妃殿下、ヨルダン大使閣下ご夫妻、マラウィ大使閣下ご夫妻、英国大使館参事官ご夫妻、米国国際開発庁参事官様、外務省国際協力局長様のご臨席のもと、ケア・フレンズやケア・サポーターズクラブの会員の皆様

をはじめ、大勢のお客様にご出席いただき、このように盛大にCAREの60周年を祝うことができますことを、心より嬉しく存じます。

また、今回初めてケア・インターナショナル副会長であり、CARE60周年委員会

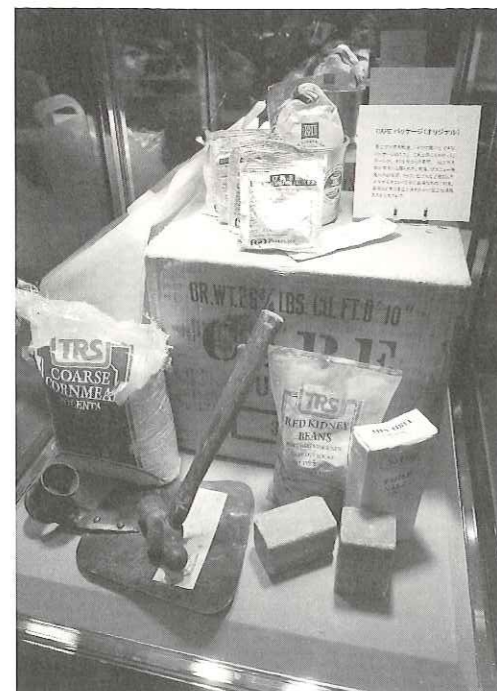
の委員長でおられますマリナ・ドゥ・ブランドご夫妻に海外からお越しいただき、この特別なディナーにご参加いただけることになりましたことは、ケア・インターナショナル ジャパンにとりまして、大変光栄なことでございます。



CAREは第二次世界大戦後、ヨーロッパの被災者を支援するためにアメリカで設立された市民団体として1945年に活動を開始しましたが、3年後には敵国であった日本にもその支援が届きました。

当時の日本はご存知の通り、温かいご飯もおなかいっぱい食べられないような状況でした。そのような中で、CAREは粉ミルクや砂糖、せっけんなど生活必需品が詰められた「ケア・パッケージ」を1000万人の日本人に寄付してくれたのです。実は私もその恩恵を受けた1000万人の中の一人でした。

当時私は10歳でしたが、その情景は今でも鮮明に覚えています。キティ台風、ジェーン台風が立て続けに日本を襲い、私の住んでいた家や近所の家はすべて浸水してしまい、食糧も不足していました。ケア・パッケージが10個父のところに届いたときは、遠い国から海を越えてやってきたこのダンボール箱に何が入っているのか、ワクワクしながら父が開けるの

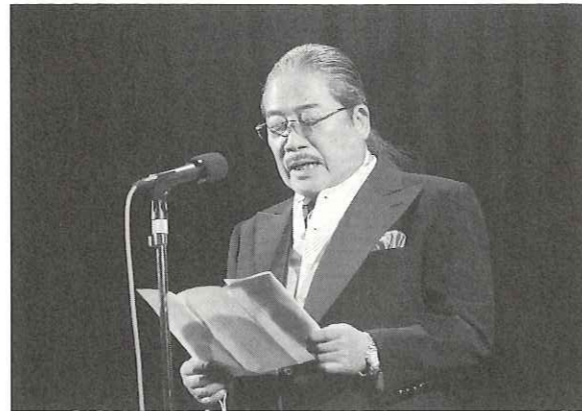


会場には、60年前に実際にアメリカからドイツに届けられたCAREパッケージと、その中に入れられていたもののサンプルが展示されました

を肩越しからのぞき込みました。すると、見たこともないような食糧や缶詰がたくさん出てくるのです。当時日本では簡単に手に入れることができなかったチョコレートや口ほおばったときの感動は今でも強い記憶に残っています。

おいしいものがたくさん詰まったケア・パッケージを10箱すべて取っておきたという気持ちはやまやまでしたが、実は父はこのケア・パッケージの中身を町の人たちに配布する重要な役割を担っていました。まじめで責任感が強い父は、町の中で最も大変な被害に遭った人が誰かを調べ、最も必要な人たちにしっかりと物資が届くようにしました。一生懸命、CAREにまかされた任務を果たそうとする父の姿を見ていた私は、村人が「関口はいいものを全部自分で取り占めようとしているに違いない」などとうわさしているのを知ったときは、怒りがこみ上げてきました。子ども心に、「どんなに良いことをしようとしても、必ず悪いことを言う人はいる」「大切なことは、自分の心の中で正しいことをしていることを確信していること」だと思いました。

あれから何十年も経ち日本は豊かになり、私もビジネスで成功し、いつか恩返しをしたいと思っていました。ある日、日本でのCARE設立の中心的存在でいらした横田大使からお声がかかり、任意団体であったCAREを財団にするために協力してほしいという申し出を受けました。CAREの支援を受けて育った私にとって、これ以上光栄なことはありませんでした。そこで、財団設立の条件であった基本財産を寄付することになりました。



開会の挨拶を述べる当財団の関口理事長

CAREが設立されてから60年が経ちましたが、今ではCAREはアメリカや日本を含め、世界12カ国のメンバー国から成り、アジア、アフリカ、中南米、中東、東欧の70カ国以上で4500万人の人々を支援する組織に成長しました。そして数十名で始まった組織は、今では13000人以上のプロフェッショナルなスタッフが活躍する組織となりました。

地域コミュニティの人々との深い信頼関係、途上国政府との協力関係、政策レベルでの国連などとの連携、そして何よりも常にCAREを支援してくださってきたケア・フレンズやケア・サポーターズクラブの会員の皆様やCAREの会員・寄付者の方々のご理解とご支援があったからこそ、CAREは活動を効果的に継続することができたのです。

本日は、日本におけるCAREに大きく貢献してくださいました安倍洋子様、加藤睦子様、横田笑様の表彰式、そしてグローバルに活躍される中丸三千繪さんのコンサートがございます。

長年、CAREを支えてきてくださった方々にCARE設立60周年記念ディナーを存分にお楽しみいただきたいと存じます。

今後とも、ぜひともご支援・ご協力のほど、心よりお願い申し上げます。

最後になりましたが、皆様の益々のご健勝をお祈りして私からのご挨拶とさせていただきます。

カンボジア 「レインボー事業」 終了報告

■基本情報

活動期間：2000年7月～2006年6月
(6年間)

活動地域：カンボジア王国カンダール州
ルックダイク地区および
日本国内の小中学校

対象者：カンボジアと日本の小中学校
校の子どもたち

レインボー事業は、日本全国の延べ765の小中学校・団体・個人の皆様からご協力をいただき、2000年から6年間カンボジアと日本国内において実施してきました。この事業は、両国の子どもたちが一緒に学ぶことによる国際文化交流の活性化に焦点をあて、以下の活動を行ってきました。

6年間の活動内容

- ①日本の小中学校などから文房具を総計1,339箱分（日本の子どもたちが描いた絵画を含む）、収集
- ②同箱をカンボジアの小中学校27校に提供
- ③日本とカンボジアの小中学校で絵画を交換、各学校で展示や紹介
- ④教師と子どもたちを対象とした絵の描き方ワークショップをカンボジアの小中学校69校で開催
- ⑤絵画授業の指導法についてのワークショップをカンボジアの教師175名に実施
- ⑥一部の対象地域で教育文化学習センターおよび学校とコミュニティの図書施設を整備

■厳しい教育環境の中で

カンボジアでは、1975～79年のポル・ポト政権時代に学校の存在が否定され、多くの教師や知識人が処刑されました。新政権樹立後、政府は教育の復興に注力してきましたが、現在も多くの問題を抱えています。優秀な教師の不足、貧

しさのため学校を退学・留年をする子どもが多いことなどが課題として挙げられます。このような環境の中、美術の科目はあるものの、美術指導経験のある教師や美術に必要な資材が不足し、実際には授業が行われていない学校も多く見受けられます。

カンダール州ルックダイク地区は、首都プノンペンから東南に車で2時間の場所に位置し、メコン川沿いに南北50kmにわたって細長く広がっています。この地区は毎年起こるメコン川の洪水のためにカンダール州の中でも特に貧しく、地区にある小学校20校（児童数10,200名）と中学校7校（生徒数2,900名）の女子の就学率は低い上に、退学率と留年率が高い地域です。

■初めての体験—絵を描くこと、海外の子どもたちと交流すること

普段、海外と交流のないルックダイク地区の子どもたちにとって、日本から送られてきた絵を見る機会は貴重な異文化体験だったと、この事業に参加した多くの先生は言います。実は、この地域ではレインボー事業が始まるまで絵を描くことはおろか、鑑賞をする機会も少なかったため、子どもたちは何をどのように描いたらよいのか、ためらうことがありました。その際に日本の子どもたちの絵は、自信を持って自由に描くことの良いお手本となったようです。また、自分たちの描いた絵が海外に送られ、日本の学校で展示されることを非常に喜び、それが絵を描くことへの意欲につながりました。

■授業にもたらされた「色」

以前は、この地域では絵の授業の回数がとても少なく、また授業があっても、罫線入りのノートに鉛筆で

描くという方法をとっていました。学校に色鉛筆や絵の具などの画材が贈られたことによって、絵の授業に新しく「色」がもたらされました。カラフルな絵が飾られた教室は、子どもたちの元気と想像力の刺激につながっています。

■先生たちの挑戦

この事業では、教師を対象とした絵画授業の指導法のワークショップも行いました。参加した教師は、学んだノウハウを学校に持ち帰り、他の教師に教えます。教師たちは指導技術を身につけたことで美術の授業により積極的にになり、絵の授業の回数が飛躍的に増えていることが確認されました。また、絵画に触れたことがきっかけで、教師たちが自ら理科のポスター教材を作成して教室に掲示するなど、美術以外の授業にも良い影響を与えているようです。

■事業を終えて

教育を取り巻くカンボジアの環境は現在も厳しいことには変わりありませんが、教師たちの美術指導の質の向上や、経済発展に伴い現地で文房具が安価で手に入るようになってきたことをふまえ、この事業は2006年6月をもって終了しました。ご参加いただきました皆様へ、長年のご支援とご協力に心からお礼申し上げます。



インドネシア スマトラ沖津波復興支援 「国内避難民のための水と衛生プロジェクト」 終了報告

プログラムコーディネーター 鈴木 幸子

2005年3月から16カ月間、ケア・インターナショナル ジャパンは、アチェ州の2地域にて、津波復興支援活動を行いました。

主な3つの活動

被災地では、長期的に生活可能な住宅に入居できるまで清潔な水やトイレへのアクセスが限られるため、避難民の人々は下痢などの病気を患う危険性があることが調査により確認されました。そこでこのプロジェクトでは主に以下の3つの活動を実施しました。

一つ目の活動は、避難民への清潔な水の供給です。避難所や仮設住宅などがある地域は、もともと井戸や水道がなかったところが多く、これらの施設延べ62箇所にて、給水タンカーを用いて給水活動を実施しました。給水活動では、月あたり最大で約748万リットルの清潔な水を供給することができました。

二つ目は仮設トイレの排泄物の除去活動です。アチェでは、地区衛生局も地震と津波により被災したため、運営および資金面での問題を抱えており、汚物処理サービスの提供が困難でした。CAREは長期的には当該活動を衛生局に引き継ぐことを見込み、衛生局との合意のもと、避難所や仮設住宅を

中心に活動を実施し、70箇所にて汚物処理サービスを提供しました。

CAREは、避難民の意識の向上なしに水や衛生のインフラを改善しても、大きな効果を得ることはできないと考えます。そのため、上記二つの活動と並行して、住民による組織活動の支援と衛生に関する知識・情報普及活動を実施しました。住民による組織活動の支援では、保健衛生ボランティアのトレーニングや9つの水管理委員会の組織化を実施しました。また、知識・情報普及活動においては、コミュニティに設置した掲示板やテレビ・ラジオ放送による保健キャンペーンを実施し、保健・衛生知識の普及を行いました。これらの活動は、一時的な下痢の発生数を減らすだけでなく、長期的な水因性疾患のリスクを減少させることで、人々の生活の質の向上にもつながります。

被災コミュニティや援助機関との調整の大切さ

多くの機関・組織が支援活動をする被災地では、実施地域や活動内容の重複を防ぎ、支援を必要としている地域に確実に支援を届けるため、関係者間の調整が重要になります。CAREは、

■基本情報

活動期間：2005年3月～2006年6月
活動地域：インドネシア アチェ州 (バンダ・アチェ、アチェ・ブサールの2地域)
対象者：避難所および仮設住宅に居住する国内避難民20,000人 (水の支援8,000人と排泄施設の支援12,000人)
背景：2004年12月26日のスマトラ沖地震・津波で震源に最も近かったアチェ州では、死者・行方不明者十数万人に加え、60万人の避難民が発生しました。

給水・汚物処理活動に関わる諸機関の調整ミーティングに積極的に参加してきました。また支援を必要とする人々が引き続きサービスを受けられるよう、関係者への円滑な事業移管を目的としたワークショップを開催しました。政府関係者、国連機関、NGOなどの援助実施機関に加え、CAREの給水・汚物処理活動対象地域に避難・居住しているコミュニティ住民も参加しました。すべての関係者が一堂に会したことにより、今後の関係者間のコーディネーションの場としても有意義なワークショップになりました。

これから

このプロジェクトは2006年6月をもって終了しましたが、プロジェクト終了後も対象地域の人々が引き続き安全な水を得られるよう、給水タンカーよりも低コストで持続性のある井戸や水道といった水供給方法へと段階的に移行しました。今後、供給される水の質を保つために必要となる、蛇口や水道管の定期的なメンテナンスは、住民による水管理委員会が担い、必要に応じてケア・インドネシアがサポートしていく予定です。スマトラ沖地震・津波発生直後からご支援いただきました皆様にご心からお礼申し上げます。



保健・衛生に関する知識・情報普及活動の一つとして、コミュニティに設置された掲示板

インドネシア 「マドゥーラ避難民の生活復興支援 プロジェクト」終了報告

プログラムコーディネーター 鈴木 幸子

背景—地域が抱える紛争の傷あと

インドネシア中央カリマンタン州で2001年に発生した民族紛争 (先住者・ダヤック民族 対 移住者・マドゥーラ民族) により、マドゥーラ系住民のおよそ17万人が国内避難民となりました。その多くは州内の難民キャンプに収容されたり、マドゥーラ島に避難しました。紛争発生から数年が経ち人道支援が次々に終了していく中、2004年の国連の調査で住民の生活状況の悪化が確認されました。地域の最貧困層にあたるマドゥーラ避難民に収入源はなく、生活に必要な水・衛生の確保や保健サービスを受けることが難しい状態にありました。

活動の内容と成果

ケア・インターナショナル ジャパン (以下 CIJ) はケア・インドネシアとの協



機能していなかったボジャンドゥにおけるシステムが回復し、5歳未満児の成長測定も可能になった © Harsha De Silva

力により、マドゥーラ島および中央カリマンタン州の避難民約1万世帯と避難民受け入れ地域の住民に対し、水や衛生・保健・食糧などの基本的ニーズを満たすことで生活の保全をはかることを目標に、主に以下の活動を行ってきました。

①水と衛生施設の整備および保健衛生のトレーニング

清潔な水の確保を実現するために、給水活動ならびに井戸・給水塔・水道栓・トイレ・水を貯蔵するためのドラム缶などの設置と水の浄化剤の配給を行いました。またこれらの施設の継続的な使用を可能にするため、管理方法のトレーニングを住民に対して実施しました。

②農具提供などによる収入向上活動の支援

マドゥーラ避難民には安定した収入源がなく、このことが自立した生活を難しくしています。そのため収入向上活動もこのプロジェクトの大切な一端を担っていました。収入につながる物資についての調査に基づき、約8,800世帯に対して、紛争により失われた、生活を立て直すために必要な農具と種を提供しました。

③母子への保健サービスと保健教育の普及

特にCIJが力を入れてきたのが、保健サービスの質の向上です。インドネシアには、妊婦や授乳中の母親、5歳未満児へ保健サービスを提供する「ボジャンドゥ」という施設が各コミュニティにあります。母子以外の人々も病気予防などに関するアドバイスを受けられる身近な施設なのですが、機能していない場合が多く見受けられました。そ

■基本情報

活動期間：2005年5月～2006年7月
活動地域：インドネシア共和国東ジャワ州 (マドゥーラ島) および中央カリマンタン州 (サンピット県)
対象者：民族対立により避難民となった約1万世帯のマドゥーラ系住民と避難民受け入れ地域の住民
支援者：スターバックス コーヒー ジャパン 株式会社

※「イチロー・スターバックスカード」キャンペーンの売上金の一部をご寄付いただきました。

ここで保健省と協力し、約100箇所母子手帳や体重計などの資機材を提供したり、予防接種などを実施し、成長測定システムの回復を行いました。この結果、母子を中心とした対象者の90%以上の避難民およびコミュニティの人々がボジャンドゥを利用できるようになりました。

この活動で留意した点は、コミュニティが本来持っている能力とシステムを生かすことにより、プロジェクト終了後もその効果を持続可能にすることです。もともとボジャンドゥは保健ボランティアによって運営されていましたが、今後もそのような運営が可能となるよう、200人以上のボランティアに対して保健と栄養についてのトレーニングを行いました。

生活改善と避難民の帰還に向けて

このプロジェクトは、民族紛争という複雑な背景の中、人々の強い関心と積極的な参加によって目標を達成することができました。今後の活動はトレーニングに参加したボランティアや自治体関係者などによって、担われていく予定です。またCAREは、一部で民族間の緊張が継続している中央カリマンタン州において、異なるコミュニティが融合して生活改善していくことを目的としたプロジェクトを予定しており、マドゥーラ島に移った避難民がカリマンタン州に帰還できるよう支援を続けていきます。



フィールド 最前線

カンボジア 「コミュニティの ための人材育成 事業」

プログラムコーディネーター
竹中 宏美



■基本情報

活動期間：2004年10月～2007年9月
活動地域：カンボジア王国カンダール州
ルックダイク地区
対象者：奨学生、奨学生の親、コミュニティの人々、奨学制度運営委員会
資金提供者：ケア フレンズ岡山、ケア フレンズ・東京

カンボジアでは、2015年までにすべての人が9年間の基礎教育を受けられるようにすることが優先課題の一つに掲げられています。長らく続いた内戦により教育環境が整備されておらず、高学年になるほど就学率が低く、また、男女の間に大きな就学格差が見られます。

女子が学校に通えなくなる最大の理由は、経済的な理由です。無償教育といえども、学用品や制服にかかる経費、交通費、昼食費などは貧困家庭にとっては大きな負担となります。また、学校までの距離が遠く、雨季の洪水で悪路になると、通学が困難になります。さらに、文化的に男子の教育が優先される傾向にあり、女子教育の重要性が認識されない中、女子は学校に行くかわりに家事や家業を手伝わなければならない、学校に通えない女子が多数存在しているのが現状です。そして、女子の退学率が高いことから、教師になれる女子の割合も低く、結果として女性教師といった女子生徒のモデルとなるような人材がコミュニティにおいて不足し、それが、女子が一層、教育から遠ざかる原因にもなっている状況です。

地域と共に運営する奨学事業

ケア・インターナショナル ジャパンは、ケア フレンズ岡山、ケア フレンズ・東京からのご支援を受け、カンボジアの首都プノンペンから東南方向に車で2時間、メコン川左岸沿いにあるカンダール州ルックダイク地区で「コミュニティのための人材育成事業」を実施しています。この事業では、前事業の「女子教育奨学制度事業」において中学課程を修了し、高校に進学した

奨学生を対象として、高校課程（3年間）を支援しています。また、彼女たちがコミュニティの発展に役立つ知識・技能を習得し、それをコミュニティの人々と共有して、最終的には奨学生がコミュニティの発展に貢献することを目標としています。この事業では、教育青年スポーツ省と地区奨学制度運営委員会の協力のもと、ケア・カンボジアと共に活動を行っています。

地域の発展に貢献できるような人材の育成

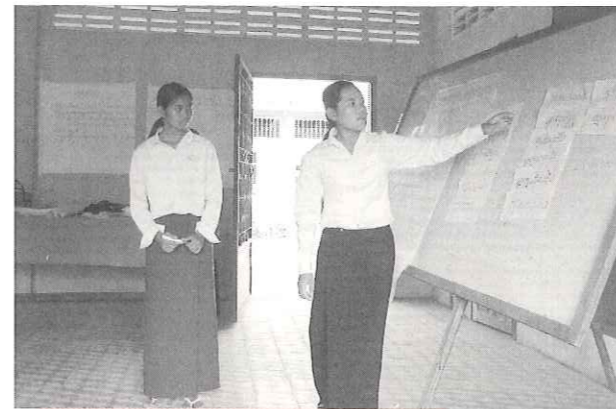
この事業では、奨学生が習得した知識や技能をコミュニティの人々と共有し社会に還元することで、地域の発展に貢献できるよう、前事業を次のように発展させた形で計画し、活動しています。

まず、奨学生に対する就学支援については、寄宿費などの資金や学用品を提供するほか、ホームエコノミクス授業を設け、調理や縫製などの実習に重点を置いています。また、勉学を強化するために補習授業を実施するとともに、学習グループを作って奨学生同士で学びあう活動を継続しています。さらに、奨学生が習得した知識や技能をコミュニティの人々と共有するためのコミュニティ活動の機会を設け、この活動を行う際に基礎となるファシリテーションなどの技術も習得できるようにしています。一方、コミュニティの理解を得るため、親やコミュニティの人々に対してもジェンダー意識向上ワークショップを実施し、女子教育への理解を深める活動を行っています。

具体的な活動例

例1：コミュニティの発展に必要な知識・技能の習得

奨学生を対象として、ピア・エデュケーター（同世代が同世代に教えること、教える人）訓練を実施しました。これは、奨学生がコミュニティ活動を行う際に必要となる心構えや基礎技能を身につけるためのものです。夏休みには集中講座にて、相手の話に耳を傾けることや相手を尊重し良好なコミュニケーションを築くことなどを学んだほか、相手の参加を促す技能とともに、



さまざまな活動を通して、多くの人の前で説明する能力も身につく。コミュニティの人々を対象としたワークショップにて



女性の人身売買や家庭内暴力などの問題点を整理し、話し合う奨学生たち

プレゼンテーション・ゲーム・読み聞かせ・メッセージを伝える方法などの技能も学びました。

例2：習得した知識・技能の共有（コミュニティ活動の展開）

8月の休暇時に奨学生と奨学制度運営委員会が主体となり、3つの学校群において、各3日間のコミュニティ活動を実施しています。これまでに家庭内暴力、女性・子どもの人身売買、コミュニティの環境保護、コミュニティの住民参加（地方分権化）を題材にワークショップを行い、親、村人、下級生、コミュニオン・メンバーなどに対してメッセージを伝えました。

例3：コミュニティにおけるジェンダー意識の向上

ジェンダー意識向上ワークショップでは、コミュニティの人々は生物的性差と社会的性差の違いを学び、カンボジア社会で誰が資源（家畜・畑などの私有財産や水源・森林などの公共財産）を使用でき、その資源を管理し、

所有しているのかということについて分析し、そこにジェンダーによる偏見がないかどうかを話し合い、理解を深めました。

奨学事業を支える仕組み

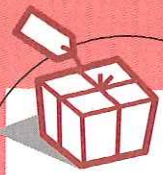
奨学事業を支えているのは、奨学生の親、コミュニティの人々、そして奨学制度運営委員です。奨学制度運営委員会は、親・教師・婦人代表・地区代表などの15名から構成され、奨学生の生活や契約の管理、学習の質の確保、地区レベルの連絡調整などを行っています。具体的には、奨学生・親や寄宿舎の家主との契約、経費の支給、教師との連携、奨学生の学業や出欠のフォロー（教師との定期的な確認や家庭訪問）、補習授業の実施、奨学生・親との定期ミーティングの実施、教育青年スポーツ省やケア・カンボジアへの報告などです。これまでの活動から、特に教師やコミュニティのネットワークを強化することが奨学生の出席率やパフォーマンスの改善につながるこ

がわかりました。

現在、奨学生たちは……

奨学生はさまざまな活動を通じ、知識だけではなく、将来コミュニティで活動する際に役立つ実践的な技能を習得しています。また、村人に説明したり、話し合ったりすることで目上の人と話すことに慣れるとともに、下級生への見本となって活動ができていくことで、確実に自信をつけてきています。コミュニティの人々も、女子教育に対する理解を深めるとともに、何よりも奨学生たちが生き生きと自信を持ってワークショップなどを運営する姿を頼もしく思っています。2006年10月に高校3年へと進級した奨学生たち。現在、今年8月に行われる卒業試験に向けて頑張っています。

*この事業をご支援くださっているケアフレンズ岡山とケアフレンズ・東京の皆様にご心よりお礼申し上げます。



カンボジア発スマイル宅配便

Smile from Cambodia

カンボジアのプレイベン州において2004年2月より実施してきた「女子教育事業 サマキクマールⅡ」が2006年12月に終了しました。この事業では、女子教育に対する意識の低い貧困地域において、女子に対して奨学制度や識字教室を実施するとともに、親や教師、地域の人々を対象として女子教育に対する理解を高めるための意識向上ワークショップなどを行ってきました。ここでは、事業に参加したカンボジアのある教師からのメッセージを一つ、紹介します。

* 2006年11月30日にこの事業の終了報告会を開催しました。詳細は、本誌3ページ目の「事務局からの報告」をご覧ください。

CAREが与えてくれた新しい知識や考え方

サマキクマール識字教室教師 Sear Sreyown

CAREがこの村で活動を始める前、私はごく普通の農民でした。あるとき、CAREが識字教室の教師を探していることを知り、以前から教師に関心があった私は応募しました。希望がかなって教師となった私は、教授法についてのトレーニングを受け、現在、識字教室で教えるようになって1年経ちます。私は教えることが好きで、クラスには多くの生徒がいます。

私は以前、それほど思慮深くはありませんでした。教師となった今、何かを行うときは、教育者としてどうすべきか、よく考えてから行動するようになりました。また、青少年に関する教育・教授法や文学に関する知識などは日ごとに増えていきました。私の性格や立ち居振舞いも変わりました。

家族は私のことをよく理解し、励ましてくれます。教師になって、私の生活は変わりました。なぜなら、CAREからお給料をもらえるからです。以前は生計を農業に頼っていましたが、今では家族はより良い生活を送ることができています。

私が教えた生徒も大きく変わりました。読み書きができ、家庭内で問題が生じたときにはそれを解決できるようになりました。

CAREが計画したカリキュラムは、家庭の問題・健康・農業など生活にとっても役立つ内容です。私は教育はとても大切だと実感しています。教育を受ける機会がないと、生活は困難なものとなります。将来、私が子どもを持ったときは、家庭内にどんな障害があろうと、子どもに教育を受けさせようと思います。

CAREは教育の価値に対する村人の意識も変えてきました。これまで、村人の多くが子どもを学校に行かせず、働かせていました。CAREが村に確かな成果を残してくれたので、コミュニティは変化を遂げました。現在は、村の多くの人々が識字教室に子どもを通わせるようになりました。これまで生徒たちは文字を全く読むことさえできませんでしたが、今では読み書きや計算もでき、家族のためにその能力を使うことができます。



教員トレーニングを終え、修了証を手にする筆者(左)。トレーナー(右)、プロジェクトマネージャーの遠藤恵(右から二人目)

* サマキクマールにおける識字教室の教師採用について プロジェクトマネージャー 遠藤 恵

この事業では、すべての識字教室の教師をコミュニティから採用しています。コミュニティの人々を教師として採用するための条件は、資格の有無、教育を受けた期間や教育レベルではなく、コミュニティのために仕事をしたい、コミュニティ内の人々とよい関係にある、人の話を聞いてコミュニティの人々ときちんとコミュニケーションがとれる、識字教室の準備のための時間を確保できる、などです。教師の資格を持っている人も応募しましたが、前述のような条件で選ばれた人は、皆、教師の経験のない人ばかりでした。

3年の事業期間を通して見てみると、彼らの活動に対する熱意や責任感はすばらしく、サマキの識字教室がうまく進んだことに大きく関わっています。サマキだけでなく他のプロジェクトでも同様に、コミュニティ教師の評判は高く、元教師よりも経験のない人を採用するほうが、教え方の固定観念などがなく、生徒中心型の新しい教授法や双方向のコミュニケーションをすんなりと採り入れることができるようです。



ここでは、世界中のCAREの活動地から、ストーリーとともにCAREの活動の一端をご紹介します。

スマトラ沖津波から2年 ～インドネシア アチェからのストーリー

守られた約束 Marge Tsitouris

2005年9月、私はスマトラ沖津波により被災した地域をいくつも見てまわりました。インドネシアのバンダ・アチェでは、仮設の母子健康センター、水の配給所、仮設住宅、住宅の建設現場を訪れました。私は、CAREで25年間以上、公衆衛生と災害支援の専門家として働いてきましたが、一瞬にして多くの人々のすべてを打ち砕いてしまった惨事に戦慄が走りまわりました。

ある光景が特に印象的でした。私たちはCAREと協働しているカナダの建設会社 Planning Allianceの建築家と共に、診療所の跡地にいました。診療所は跡形もなく、建物の残骸であるコンクリートの瓦礫と、診療所とCAREの名前が書かれた看板だけが残っていました。建築家のAnierin Smithは私たちに自信たっぷりに言いました。「4～6か月後には、十分に機能的で、良い設備とスタッフのそろった診療所を見られますよ」。診療所を再び作る事ができるというだけでなく、スタッフもそろえられるという確信を持っていることが印象に残りました。

それからちょうど1年後、私はバンダ・アチェに戻ってきました。再建をしている町中を車で通り過ぎながら、モスクが目にとまりました。そこはまさに、以前、診療所があった場所の目の前でした。そしてそこにはあったのです。海緑色とサンゴ色の2階建ての診療所が、まだ再建に向けて変化の途中にある周辺地域の中で、そこだけが輝くばかりに明るい場所でした。

私たちはドアのところで、担当の助産師のSinartiさんに会いました。彼女は、車のCAREのロゴを見ると、腕を大きく広げて「ようこそ」と言って微笑み、中を案内してくれました。その新しい診療所に私は感銘を受けました。明るく、風通しがよく、清潔で、穏やかなパステルカラー色のタイル張りの壁がまぶしく見えました。スタッフの一人が、新しい布にくるまれた生まれたばかりの赤ん坊を抱えていました。母親はすぐそばで横になり、疲れた様子で微笑んでいました。Sinartiさんは、彼女自身がこの建物の色を

選んだのだと話しました。この診療所が病院のようではなく、誰かの家のように心地よい場所に見せたかったからです。

この公立の診療所は、出産前後の診療と母子への対応、健康指導と予防接種をこの地域の貧しい住民に対して優先的に行っています。CAREとアメリカのジョンズ・ホプキンス大学系列の国際的な保健医療団体であるJHPIEGOの支援を受け、設備や家具がよく整備されています。診療所は、Sinartiさんと2人のアシスタントによって運営されており、診療時間は設定されているものの、出産のためには24時間開かれており、助産師がいとも待機しています。

47歳のSinartiさんは、10年間、この診療所の敷地内で暮らしてきました。津波が襲ったとき、彼女はちょうど出産に立ち会っ

CARE in Indonesia

2004年12月26日のスマトラ沖地震・津波により、インドネシアでは13万人以上の人々が亡くなったほか、50万人が家族や家、生計の手段を失いました。CAREは、津波復興支援を通してこれまでにバンダ・アチェ、アチェ・ブサル、さらに2005年3月に生じた地震により被害を受けたシムル島を含め、35万人の人々を支援してきました。現在は、5年の長期計画に基づき、住居・インフラ・被災者の生計の立て直し、水と衛生・母子の健康などの状況改善に向けた施設・サービスの復旧と人々の意識向上、被災者の心のケア、将来の災害に備えるためのコミュニティの危機管理などにおいて支援を行い、包括的な取り組みを行っています。

特に、生命にかかわる健康面での状況改善は急務でした。アチェでは、津波以前から内戦により医療システムが損傷しており、インドネシアの他の地域よりも医療・保健施設へのアクセスが困難な状況で、栄養失調は深刻な問題でした。津波により400以上の医療・保健施設が破壊され、本来なら津波後の保健分野の再建を担うはずの医者や看護師なども亡くなってしまいました。

現在、CAREは、施設やサービスの立て直しおよび改善、医療・保健機関で働く人々の能力向上のための支援、家庭内で健康が管理できるよう健康に関する教育の提供、被災したコミュニティの医療へのアクセス拡大などの支援を行っています。CAREのヘルス・プログラムによって支援を受けた人の数はこれまでに35万人、CAREの支援による医療や栄養価の高い食事の配給を受けた女性と子どもの数は約25,000人に上ります。また、CAREの支援を受けた診療所は約270箇所、トレーニングを受けた医療・保健施設で働く人々の数は約780人になります。

CAREのヘルス・プログラムでは、特に母子の健康に重点を置いて実施してきました。コミュニティに密着した保健サービスの提供施設である「ボジャンドゥ」のサービス拡充のほか、医療・保健施設で働く人々に対して、栄養失調の初期の兆候を発見し、治療するための方法についてトレーニングを実施しました。また、母親や子どもの世話をする人を対象として、栄養や感染症についての教育も行いました。2005年にCAREが支援を始めてから、シムル島では、対象地域のボジャンドゥを訪れる子どもの栄養失調の割合が、当初の21パーセントからほぼ半減しました。

いて重症を負いました。その日、他の多くの人たちがそうだったように、その母親と赤ん坊は亡くなりました。

仕事について聞くと、彼女は大きな笑みを浮かべてこう言います。「これが私の仕事です。私は誰かの助けになりたい。それが私の誇りです」。彼女は一日に30～40人の妊婦を診ます。そして7月にこの診療所がオープンして以来、45人もの赤ん坊を取り上げてきました。

私は、診療所を出るとき、まだ生まれて2カ月の赤ん坊に会いました。母親と赤ん坊は元気で、健康であるために彼らは診療所を頼りにしています。診療所の人々は、「生活は元に戻ってきている」という彼女の言葉と全く同じことを言っていました。この地域でこの診療所を再開させたことは、ここに住む女性たちにとってとても重要な出来事です。彼女たちは再び、必要なときにはそこに誰かがいてくれるという安らぎを得たのです。

私スタイルのCAREライフ

“Delicious” Volunteering!

～ボランティアは“おいしい”!

ケア・インターナショナル ジャパン エリック コーピエル
会員、ボランティア Eric Korpziel



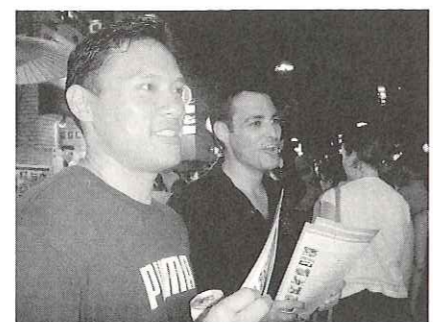
こんにちは、エリックです！ CARE has been a great organization to volunteer with in both the U.S. and in Japan. CARE has an admirable aim and staff made me feel welcome. . . they even allow my strange sense of humor! At a festival when someone is looking at promotional material but seems to lose interest, I might yell “Oishiidesuyo!” to get their attention. Luckily, rather than thinking “あの外人はちょっとおかしくない?”, Japanese staff laugh too . . . and some customers buy CARE products!

I first heard of CARE when the Asian Tsunami hit. Because I had lived almost two years in Southern Asia as a volunteer/backpacker, I felt close to the people of the region but thought, “What can I do?” After researching various NGOs, I found CARE gives a very high percentage of collected money to programs in the field. I helped at three CARE events, collecting funds at Seattle Supersonics games. The fans appreciated us and I collected the most of my group! I felt I wasn't asking for a favor but was giving a chance to spend money on things more important than beer or hot dogs (food or a blanket for a child).

In Japan, CARE volunteering has been just as fun, but I do notice differences. For example, strangers in Japan are nicer to me than in my own country but when discussing charity, it can change. Japanese who are typically so receptive have sometimes been quite cold and uninterested in hearing about volunteer opportunities. I am so used to seeing Japanese be nice that I was initially quite disappointed. Then, I thought, why not have fun?!

At events, I sometimes say Japanese which I know is wrong like, “Please try our tako yakii!” when holding handicrafts. Or, I will use Tohoku dialect and yell “おぼんでがす” when I usually say “いらっ

しゃいませ”. I am not sure if this is the right approach, but it gets people to smile. . . and promotes awareness towards CARE and its activities. The Thai Festival, Azabu Fest, and Global Festa were great fun and I admire what CARE staff do. Thank you and . . . CAREのイベントと一緒に参加しましょう。とってもおいしいよ!!



CAREとして初めて参加した2006年8月の麻布十番納涼まつりにて、アメリカ人の友だちを誘って、CAREのパンフレットを持って呼びかけをしてくださいました。迫力満点!

こんにちは、エリックです！ CAREは、(私の母国の) アメリカ、そして日本でも、ボランティア活動をするのにすばらしい団体です。CAREは、賞賛に値する高い目標をもって活動しており、スタッフはボランティアをしようとする私を歓迎してくれます。私のちょっと変わったユーモアのセンスさえも受け入れてくれます。イベントでCAREの広報資料を見ていてあまり関心がなさそうな人に、私は注意を引こうと「おいしいですよ！」などと呼びかけます。幸いなことにスタッフは、「あの外人はちょっとおかしくない？」と思うどころか、一緒になって笑ってくれます。このように言うと、CAREグッズを買ってくれる人もいます!

私が初めてCAREのことを知ったのは、スマトラ沖津波が起きたときです。ボランティアやバックパッカーとして南アジアに約2年間住んでいたことがあり、その地域の人々に親しみを感じていた私は、自分に何ができるだろうと考えました。たくさんのNGO団体を調べたところ、CAREは集まったお金の大部分を支援活動に使っている

ことがわかりました。その後、私はCAREの3つのイベントを手伝い、シアトル・スーパーソニックス*の試合で募金活動を行いました。ファンたちはCAREの活動に共感してくれて、私はグループの中で最も多くのお金を集めたのです！ そのとき感じたのは、私は支援をお願いしたというより、ビールやホットドック以上に大切なもの、つまり、困難な状況にある子どものための食べ物や毛布にお金を使う機会を人々に提供したのだ、ということです。

日本で行うCAREのボランティアは楽しさと同じですが、アメリカとの違いを感じます。例えば日本では、初めて会う人でも、私の母国アメリカよりも私に親切にしてくれます。しかし、チャリティーの話をするとはならず、一般的にとても理解のある日本人たちが、ボランティア活動となると、時にはとてもそっけなく、関心を示しません。私は親切的日本人の姿を見ることに慣れていたので、最初はとてものがっかりしました。それから思ったのです。だったら、楽しくやればいんじゃないかと。

イベントでは、私はわざと間違えて日本語を使うことがあります。例えば(タイなどの) 民芸品を持ちながら、「たこ焼きはいかがですか?」と声をかけます。あるいは、本来「いらっしゃいませ」と言うべきところを、東北弁を使って「おぼんでがす」と叫んだりします。こういったアプローチの仕方がよいのかわかりませんが、こうするとみんなにっこりしてくれて、CAREという団体とその活動に対して関心を引き出すことにもつながります。(これまでに参加した) タイ・フェスティバル、麻布十番納涼まつり、グローバルフェスタなどのイベントはとて楽しく、私はCAREスタッフの活動に感心しています。

それでは最後に……CAREのイベントと一緒に参加しましょう。とってもおいしいよ!!

*全米プロバスケットボール協会(NBA)のチーム



Ericさんのユーモアを交えた呼びかけに、思わず立ち止まる人は多い。立ち止まってくれたら、丁寧にCAREの活動について説明する。タイ・フェスティバルにて

ジャワ通信

ラマダンの苦と楽

ジャワ島地震緊急支援事業
プロジェクトマネージャー 熊澤 ゆり

インドネシアの人口の87.1%はイスラム教徒であるが、彼らは義務の一つである断食の月、ラマダン(2006年は9月24日~10月22日)は日の出から日没まで飲食や喫煙はもちろんのこと、人によっては唾(つば)を飲み込むことすらしないそうだ。これは自己鍛錬、自己反省と同時に貧しい人々の苦しみを体験し、他者への思いやりを育むためののだという。

とはいえ日没近くには皆、余裕がなくなるのか、道路は帰路を急ぐ車でどことなく殺気立つ。大通り沿いには忙しい人々を当て込んで、持ち帰りの軽食やスナック類を売る屋台も新たに登場する。日没後の食事は家族や友人たちと楽しむというのが習慣らしいが、夕食後もショッピングセンターなどに出かける人、モスクへお祈りに出かけるらしい人たちで町はなんだかお祭りの雰囲気である。

CAREのジョグジャ事務所では、11人のスタッフのうち8人がイスラム教徒、3人がキリスト教徒という構成だ。ラマダン中の昼食の時間、皆がどのように過ごすのだろうと疑問に思っていたが、ク

観光客が集まるジョグジャカルタの繁華街マリオボロ通り。CAREスタッフの買い物スポットの一つ



リスチャンの人たちは何の気兼ねもなくいつも通り事務所での出前あるいは近くの食堂で昼食をとる一方、ムスリムの人たちは事務所のお祈り用の部屋でお祈りをしたり、近くのモスクへ……と自然に別行動をとったのである。

非ムスリムの私は、精神修養とは程遠い断食への好奇心に、日頃の過食を反省してのダイエット……と、おおよそ支離滅裂な考えから断食を試みた。もっとも日本の真夏のような気候の中、昼食だけを抜いたのだが。いざ始めてみると、日の出後に朝食をとり水分を補給しても、お昼過ぎには頭がボーっとして働かなくなった。いくら「郷に入っては郷に従え」でもこれでは仕事にならない。

あわてて砂糖入りコーヒーを飲んだところ、頭がシャキッとした。結局、初日から水分と糖分を補給するという不完全な形での断食になった。ラマダン期間中は仕事が進まないのが常であるが、私から見ると、たとえ非能率でも日没まで仕事をし、一見平気な顔をしている人々は尊敬に値するのである。

何はともあれ、一日の仕事が終わる頃には飲食解禁の5時半になる。まずは皆で甘いシロップ入りの水で乾杯。誰かが買ってきた揚げ豆腐やテンペ(水煮の大豆を発酵させたもの)などをつまみ、お腹が落ち着いたところで帰宅、あるいは皆で夕食に出かけることになる。そのほとんどが単身赴任者で普段から一緒に出かけることの多いジョグジャチームだが、ラマダン中はこの頻度が増え、いつもより食事の場が盛り上がる。

効率優先の日本人にはラマダンは仕事が進まない憂うつな、あるいは諦めの一月である。しかし神の教えに従う人々にとっては、昼は苦難をともにし、夜はともに楽しむという聖なる月なのだろう。私のいい加減断食では精神の修養にはならなかったが、日没後の楽しみは大いに堪能させてもらった。被災地の人々にも楽しみのときがあることを願いつつ。



CAREのジョグジャカルタ事務所のジョグジャチームのメンバー(後列左から3番目が筆者)

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol.5
2007年2月28日発行 (季刊)
編集責任者：野口 千歳
編集：菅沼 みゆき、関口 弘美

財団法人
ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel : 03-5950-1335
Fax : 03-5950-1375
E-mail : info@careintjp.org
www.careintjp.org

CAREマンスリー・ギビング・プログラム

途上国や紛争地域において最も困難な状況にある人々の自立を支援するCAREの活動は、中長期的な計画に基づき、実施されています。これらの多くの活動を安定的かつ効果的に進めるためには、皆様の継続的なご支援が必要です。

「CAREマンスリー・ギビング・プログラム」では、毎月1回、1000円単位でご自由にお決めいただいた定額寄付金をご指定の金融機関や郵便局の口座から自動的に引き落とすことで、継続的にCAREの活動をご支援いただけます（手数料は免除されます）。寄付額の変更やご寄付の停止も随時、可能ですので、安心してプログラムにご参加いただけます。

たとえば、**1日100円**のご寄付は、世界中にたくさんの笑顔を生みながら、1年間で次のように実を結びます。

●ベトナム HIV/AIDS対策

移動・出稼ぎ労働者やコミュニティの人々**52人**に対して、HIV/AIDS予防のトレーニングを実施できます。

- HIV/AIDS感染リスクを未然に減らし、人々の健康や生活を守ります。
- HIV/AIDSに対する正確な知識不足による偏見や差別をなくします。

●カンボジア 女子教育

貧しい家庭の女子**34人**が、1年間学校に通うことができます。

- 読み書きやライフスキルを身につけた女子は、自分の身を守り、未来を形づくることができます。
- 保健衛生や栄養などの知識を得て、家庭やコミュニティに貢献する人材を育てます。

「CAREマンスリー・ギビング・プログラム」の詳細については、以下までお問い合わせください。

「CAREマンスリー・ギビング・プログラム」に関するお問い合わせ先
(財) ケア・インターナショナル ジャパン マーケティング部
Tel: 03-5950-1335 E-mail: monthly@careintjp.org

* 皆様のご意見をお寄せください。

CARE Worldでは、皆様からのご意見、ご感想、ご要望を募集します。ご意見、感想などは、CARE World 誌面上にてご紹介させていただきます。また、「CAREの活動のこの点が知りたい」「今後のCARE Worldでこういったことを取り上げてほしい」などのご要望については、次号以降の企画に順次、盛り込んでいきます。皆様と一緒に「CARE World」を広げていきたいと思っております。

ご意見、ご感想、ご要望は、当財団事務局まで郵送、ファクス、メールのいずれかの方法でお送りください。お待ちしております！